

2025.12
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とくやく 富 薬

12号
第47卷
No.437



ラッキョウ *Allium chinense* G.Don

(ユリ科 *Liliaceae*)

生 藥 ガイハク（薤白）夏の休眠期に掘取り、茎葉、ひげ根を除き、熱湯で煮てから陽干する。

成 分 硫黄化合物 : alliin, diallylsulfide, diallyldisulfide dimethylsulfide 等。

効 能 胃痙攣、下痢、腰痛、冷え性、胸痛、食欲不振等に用いる。括樓薤白酒湯、瓜呂薤白半夏湯などの漢方処方にも配合される。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

○○表紙について○○



中国の揚子江流域、ヒマラヤ地方原産の多年草で、鱗茎は卵状披針形か狭卵形、鱗茎より数葉を叢生します。葉鞘は短く、葉身は線形で長く30–60cm、先は尖り、中空で1本の稜線があり、冬でも枯れることは 없습니다。葉の断面は5稜を帯びた三角状の扁円形で、6月頃に枯れます。この頃に収穫し、夏から初秋に鱗茎を植え付けると、翌春になって繁り、数個の新鱗茎ができますが、掘らずに栽培を続けると、晩秋には40–50cmの花茎を単生し、茎頂に紫色の小さな釣鐘形の花を散形状に咲かせます。

中国原産ですが、日本には平安時代に渡来したようで『本草和名』(918) や『和名抄』(931–937) に「薙 和名於保美良」の名で収載されています。同時期の『延喜式』(927) の「典藥寮 元日御薬」の中に「薙白甘茎」の名があるところから薬用として利用されたと思われます。「ラッキヨウ」の名は『本朝食鑑』(1692) に「薙 於保仁良と訓す。…羅津岐與と称す」とあり、日本の本草書では初めて「らつきよ」の名が使われました。次いで『和爾雅』(1694) でも「薙 言は辣韭也」とルビが振られています。後の『成形図説』(1804) に「良通伎夜宇 唐音辣韭の訛なり。今漬人、辣韭の字とラッキウと呼べり」と語源が説明されています。以降漢名は「薙」、和名は「ラッキヨウ」になりました。

この頃から盛んに古文献に顔を出すようになります。恐らく塩漬け、味噌漬け、酢漬けなどの貯蔵技術が上がり、保存が効くようになって食用の需要が増えたためと考えられます。盛んに栽培も行われ、『農業全書』(1696)、「薙、是を火葱とも云う。味少し辛く、さのみ臭からず。功能ある物にて、人を補い温め、または學問する人つねに是を食すれば、神に通じ魂魄を安ずる物なり。うゆる地、白沙の軟らかなる肥地を二、三遍も耕こなし、二、三月分けて一科に四、五本づつうゆべし。さいさい中うちし、根の廻りをかきさらへ、畦中をきれいにしてをくべし。湿気のつよきをにくむ物なり。是もわけぎのごとく分けてとるべし。根を塩醤に漬け置き用ゆべし。又煮て食し、或いは糟に漬け、醋に浸し、又少しゆびき醋と醤油に漬けたるは久しく損せず、味よき物なり。又は醋味噌にて食す。牙音ありて氣味おもしろき物なり」と栽培法と保存法、調理法を記しています。また『大和本草』(1709) では「薙 国俗ラツケウと云う物也」と、『用薬須知』(1726) には「薙 ラツキヤウ 薙白ラツキヤウの白根」と、また『千金方薬註』(1778) は「薙 薙菜なり。…薙、肥前、長崎、筑前、福岡多く種ゆ」と、産地についての記載があります。

漢名の「薙」は『爾雅』(BC200頃) に「薙、山韭。蒼、山葱。虧、山薙。蒿、山蒜。注今山中多有此菜」とあり、「虧」について後の李時珍(1518–1593) は「薙の本来の文字は虧と書き、韭の類だ」と言っていることから、紀元前からラッキヨウが用いられていたことが分かります。

『神農本草經』(2C–3C) には「薙は、金瘡、瘡敗を治す。身を軽く薙し、飢えず、老に耐へる」と、また『名医別録』(502–536) 「薙、味辛、苦、温、毒なし。歸骨。菜芝なり。寒熱を除き、水氣を去る。中を温め、結を散す。病人、緒瘡を利す。中風、寒水腫、之を塗るを以て主る。魯山平澤に生ず」と薙の歴史も古いものです。『図經本草』(1062) には「薙は所々にある。春、秋分に蒔き、冬になると葉が枯れる。爾雅に虧は山虧(薙)なりとあるは山中に生えるもので、茎、葉は家薙と相類しているが、根がやや長く、葉がやや太く、あだかも鹿葱(チョウセンシユロソウ *Veratrum nigrum*) のようで、體、性もやはり家薙と同じである。今は一般に用いることが少だ」と『爾雅』に記載されていることを述べています。(村上守一 記)